

第1回 令和5・6年度武蔵野市長期宿泊体験活動検証委員会概要

1 教育委員会より

- ・本委員会は「武蔵野市長期宿泊体験活動検証委員会」ということで、セカンドの意義や目的が達成されているか、現在の取り組み方法が適切かという検証を行っていく。
- ・体験学習の効果、働き方改革、家庭・本人の負担等に対し、教育的な観点から、中立的な目で確認していかないといけない。

2 委員及び事務局自己紹介

3 議事

- (1) 委員長選出 ・武蔵野市立桜野小学校藤橋義之校長を選出

- (2) 委員会の位置付けについて ※別紙(資料1～3)参照

- (3) 検証内容についての意見交換 (委員からの主な意見)

①体験活動の系統性・発展性や、小中連携について

- ・「よりよい人間関係の形成を育む活動は軸になる」と感じた。長期宿泊では子ども同士の問題が生じた上で、その解決までを行えるため、達成感を得ることができる。
- ・中学校では、計画が決まっていること、時間的な余裕がないことから、セカンドスクールの系統性はあまり意識できていない。
- ・宿泊行事は、小6、中3にもあることを前提に検討する必要がある、セカンドスクールをクローズアップした体系図は難しいため、柔軟に考える必要がある。

②授業時間の適切な配当について

- ・総合的な学習の時間とするならば、探究学習の認識を改めて考え直す必要がある。
- ・特別活動や学校独自の特色ある教育活動に位置付けたり、市として長期宿泊の時間として設定し組んでいったりする考え方もある。
- ・総合的な学習の時間では、セカンドスクール以外にも学習内容があり、時数が足りず、教科等や学活に振り分ける等の工夫をした。また学校全体の総時数との関連も考慮すべきである。

③教師の働きかけ

- ・教師の働きかけを、児童・生徒、指導員、教員同士、保護者、現地の方等と分類して検討する。その中で児童・生徒への働きかけが一番重要である。
- ・生活指導員にも様々な方がいるので、経験や本人の様子などを考えて働きかける必要がある。
- ・児童・生徒及び関わる大人が例えば「ファミリーになろう」といった目標を明確にして共有する。

その際、大人のチームビルディングが大切で事前に関係性を構築しておく。

④評価について

- ・令和4、5年の2年間の傾向では、あまり変化が見られない。この評価方法自体の検討が必要である。調査結果がそのまま事業評価と受け取っていいのかも考えないといけない。
- ・同じ質問紙を活用した他自治体の結果と比較するとともに、調査条件も検討する。
- ・担任がアンケート調査の意図を理解したうえで、児童・生徒に回答させる。

⑤実施日数

- ・家族事情等から長期間宿泊体験や宿泊行事がある学年の担当が難しい教員もあり、人材配置が困難な場合がある。
- ・以前6泊から5泊としたが、その際メインとなる活動は削らずに済んだが、4泊となると削減が必要になる。一方で4泊でも児童・生徒は疲れていたと感じた。
- ・働き方という視点からは、教員は長期の宿泊は難しいという意見がある。
- ・セカンドスクールが20周年を迎えたときに実施したように、効果検証として児童・生徒の成長や教員の働き方についてなどのアンケート調査を行うのもよい。

⑥生活指導員の確保

- ・第1回、第2回の議論を基に、来年度から順次できることを実施してく予定であり、課題を早めに改善していきたい。
- ・学校では、より良い人材確保のため、大学に向けて募ったり、必要に応じて前年度から学生に声をかけたりしている。
- ・参加人数の確保のため、大学の授業の一環となる仕組みの設定、学生のみではなく自営業者、現地での確保、各校だけではない取組など、様々な方法を考えないといけない。
- ・指導員の働き方として、定期的な休憩の設定、児童・生徒の就寝後までといった業務時間の明確化、子どもの状況に応じた宿泊の方法について、検討する必要がある。